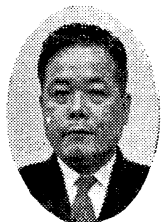


# 市 町 村 の 横 顔

## 水 海 道 市

### 概 況



横 田 市 長

『鬼怒と小貝のとりもつ縁で伸びて栄えた水海道……』これは水海道音頭の出だしの文句だが、当市は早くから水運によって開けたところである。そして、その名も水海道というように、古い歴史をひもとくと、「延暦年間、田村麻呂が東夷征討のときこの地の井戸にて馬に水飼いたるところから水飼戸といわそるにいたる」とあり、これまた水に縁がある。このように水のとりもつ縁は、

はやくから船運をおこし、県西唯一の河港をつくりあげ、諸物資の集散地として、この地方きつての繁栄をもたらした。そして大正2年、常総線が敷かれてからは、さらに加速度的に発展、今日に至る。

常総線で乗り換え上野まで1時間20分。近く、常総線が電化され、10分スピードアップと聞くから、1時間10分で大東京につながるわけ。市域は南北に長く79.65km<sup>2</sup>。鬼怒川をはさんで西は飯沼川を境に岩井町に接近し、東西は小貝川をへだてて筑波、北相馬郡境に達している。

昭和29年7月、旧水海道町外7カ村が合併して市制を施行。次いで30年3月、筑波郡真瀬村、谷和原村の一部を編入、さらに31年4月北相馬郡内守谷村、菅生村を編入して、新しい市づくりに足どりもひときわ高くスタートした。

しかし、市といつても文字どおりの田園都市。なにしろ、市域の約67%が農村地帯である。

しかし最近新しい息づきがみられてきた。つまり工場誘致がそれで、(すでに7社を誘致)首都圏整備地域、霞ヶ浦工業地区の指定とともにわかに活気づいてきた感がある。そして、工場誘致には、道路整備が急務とされ、目下、土浦～野田線道路、取手～下館線道路の改修工事がすすめられ、同時に今後には処し敷地買収が当面の課題となつている。

こうして、田園都市からいくらかでも新しい分野への開発に乗り出したのが、今日の水海道市であろう。

### 産 業

まず、とりあげられるのが農業、鬼怒川により耕地が両断されているので、おのずから生産物も異なる。

川東は、沖積の水田地帯で用排水よく二毛作が盛んで米の生産が多く、裏作として麦が作られている。とくに麦作は、機械化による多収種栽培が盛ん。また、近代農業に処し、いちご、晩秋きうりの栽培が盛んであり、とくに、いちごは反当実収25万円はかたいところで、本場ものの静岡産より品質のよいものができ、東京との取り引きも年々増加している。また、この地方は石下町を隣りに養蚕業も盛んである。

川西は、台地で洪積層の火山灰におおわれた畑地帯なので、大小麦が主な生産物。副業としては、葉たばこ、

とうがらし、そ菜、それに近年なし、ぶどうなど果樹園造成が新しい農業としておこつてきている。米作は、鬼怒川、飯沼川、菅生沼といった水利のよいところが盛んであるが、誇つてよいものに韮恩寺土地改良事業がある。これは耕地約70ヘクタールに及ぶもので、機械による近代農業がいとなまれ、旧来の農業所得より5割増しの所得が見込まれている。1戸当たりの耕地は約1.2ヘクタール、粗収入の目標を平均百万円におき、営農改善に励んでいる。

また、畜産関係では、自給養鶏、養豚事業が取りあげられ、とくに養鶏では、30万羽を目標に鶏卵の共同出荷を行ない、すでに東部では2農協が共同で育すう所を建て、多数羽し育に乗り出した。商業面では、スーパーやストアの進出で、商店街はあらゆる面で一大改革を余儀なくされた格好。このところ店舗改築の目だつのも、そのあらわれだろう。

工業面では綿織物・粘土瓦・乾めん製造が古くからのもので活気を呈し、新しいものとして機械金属工業が伸びてきたのが最近の特徴。

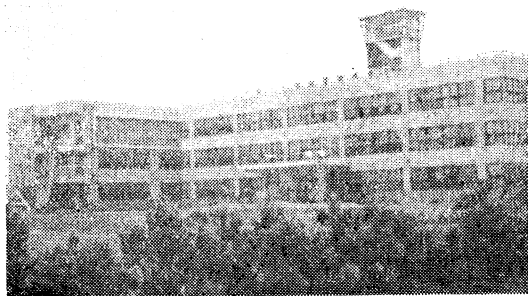
工場誘致にともないことしから経統事業で1,600戸に給水可能な上水道施設の建設と、隣接1市3町2村共同のし尿処理場の建設がはじめられている。

### 教育文化

市制後、いちはやく取りあげられたのが、学校統合で新しく絹西小学校(2校統合)と水海道中学校(2校統合、現在建築中)が建設された。そして今後は、残る全校(小学校8校、中学校5校)に及ぶ、校舎の改築が残された事業となつている。

なお、水海道中学校の建設は、予算約1億5,846万円、昨年度から3年経統事業で進工しており、廊下のない3階建ての一般校舎をはじめ、体育館、科学技術教育センターなど、完成の際には県下に誇る建物となりそう。というわけで、今後は学校の内容充実が図られるわけだが、ここで当市ご自慢の学校教育を2つ紹介しよう。  
①科学技術教育——科学技術教育とは、「技術を実際に教え、創造的実践的な能力を養うことを目的とするところがあるが」、一口にいつて、理論でなくて技術の実際化にあるようだ。水海道中学校敷地内にあるセンターには旋盤、グラインダーなど種々雑多な機械が据えられており、県下で類をみない新しい試みとして注目されている。

②学習オートメーション——別名プログラム学習といわれるもので、市内の小・中学校が共同研究している。



(水海道市役所 五木田記)

# 市 町 村 の 横 顔

## 土 浦 市



天谷市長

### 概 況

わかさぎでその名を知られているここ土浦市は、最近の国鉄電化によつて、水戸からも東京からも電車で一時間という県南の中心部にある。この市の歴史をひもといてみると、郡郷の制によれば中城分は河内郡大村郷に属し、東崎分は茨城郡大津郷に属していた。この二つの郷は旧桜川によつて永い間分けられていたが、永享年間今泉氏によつて統一され土

浦城が中城分に築かれた。長祿3年から寛正2年に至る2年間にわたつて桜川の本筋を中掛地先大曲から現在の川筋のように流れを替えて2地区を城下町として「土浦」と名づけた。土浦城は天慶年間平将間が砦を築いたと伝えられている。土浦市が今日のような発展をみたのは、古くから水陸両路の要地であり、京都との交通も開かれていたことと、郡役所の所在地として地方行政の中心地でもあつた。更には、第一次世界大戦の好況によつて隣接阿見町に海軍航空隊が開設される等によるものと考えられる。この海軍航空隊施設も戦後は、一部は教育施設或は開拓農地に利用され、また隣接阿見地区の土浦海軍航空隊跡には昭和27年9月に警察予備隊（陸上自衛隊）武器学校が開設され、右帆町の海軍航空隊跡には昭和29年2月陸上自衛隊武器補給処が開設され自衛隊の施設が増加している。懸案の常磐線電化も完成し、文化施設の拡充とともに筑波山、霞ヶ浦を中心とする観光資源の開発と観光施設の整備などにより、東京都の衛星都市として益々発展しようとしている。

### 産 業

霞ヶ浦という全国でも有数の漁資源の宝庫をもつ土浦市の産業としてまず水産業をあげたい。今年も7月21日にわかさぎ漁解禁となり、白い大きな帆に風をいつぱいにはらんで、500隻にも及ぶ船が、夕暗せまる頃出漁して行く光景は絵をみているような美しさである。このわかさぎの水上市高は、年間727円で、これからは私達の食膳をにぎわし、食事を楽しめるものにしてくれます。また駅弁で名の通つているうなぎも、年間71が水上げされている。その他こい、ふななども多くこれらによる漁獲高は金額にして1千万円にのぼつている。しかし所得金額からみると漁業及び水産養殖業は市民所得総額80億円の1%にも満たない。そして所得面からみると、第三次産業がトップで70%を占めている。これは土浦市が、県南の農村地帯の中心地であり、これら農村の消費人口と7万人の市民によつて生み出したものと考えられる。現在市民所得の19%にあたる第二次産業の所得を市ではこれからとんとん伸ばそうと計画している。工業の発達に不可欠な水に極めて恵まれており、首都圏内にありすでに市街地開発区域の指定をうけている。昭和36年度には日本住宅公団による75万坪の大規模な工場及び住宅団地の造成が行なわれた。この大規模な工業団地の造成により、ここに工場が立地した時の市の将来人口は20万人になるものと予想されているので、目下これを基とした全市にわたる総合開発計画の構想が検討されており、これによ

れば、神立、中貫、木田余、荒川地区を工業団地として開発し、これを中核とした、新市街地を形成させる。産業構造は現在第一次産業人口29%、第二次産業19%であるが、これを将来は第一次産業人口は10%にし、第二次産業人口は40%に引き上げる。これがための整備計画として工業団地の造成をはじめ上下水道、公営住宅、学校新設等各般にわたる実施計画が策定されつつある。現在までに市が誘致した工場は、日立製作所専有工場、富士ホームニング工業KK、片倉チツカリンKK等大小10社に及んでいる。

### 教育文化

春には桜まつりが盛大に行なわれ、桜の花が満開の桜川堤は、近郊近在からくり出した老若男女でいつぱいになり、川面は若いアベックのボートでにぎやかになる。夏には、七夕まつり、また最近では霞ヶ浦にヨットハーバーが建設され、ヨットが湖面をすべつていく風景は涼しさそのものである。秋には関東で随一を誇る全国花火競技大会が行なわれる。この空での芸術祭も今年は回を重ねて第31回目を迎えるわけですが、年ごとにその規模も大きくなつて行くことである。また、霞ヶ浦沿岸、神林、土浦港、桜川では四季を通じて、ヘラブナ、鯉、タナゴ、ウナギ等が釣れ、東京方面からも大勢の釣天狗がやってくる。

市街地の中央には、亀城公園（土浦城跡）があり、市民の憩いの場所となつており、最近子供の遊園地施設を完備し、子供公園としてよい子供のレクリエーションの場所ともなつている。

教育面では、小・中学校児童生徒の健全なる育成を図るため、各種の教育設備の充実強化を図っていることは勿論であります。土浦市は特に社会教育関係が進んでおり、婦人学級、青年学級の活動が活発に行なわれ、大くの成果をあげているとこのことであります。

恵まれた環境と広大な工場適地、使いきれないほどの工業用水とを有し、首都東京との距離が短かいという好条件を備えているここ土浦市は今後衛星都市として大きく発展することが期待されます。



(土浦の花火)



## 人間雑話(4)

茨城大学教授 塚本勝義

石川達三氏の「結婚の生態」は昭和十三年の作だが、現在でも引き続き読まれているらしい。急に読み返したくなり旅先で新潮文庫本を買ったら三十七年一月版であった。今日までに石川氏の書いた作品の中で、決して代表作とはいえない。作者から見れば代表作でなくても読者の側からは愛好作である場合が少なくない。こんなわけで「結婚の生態」は代表作でないが愛好作である。ちょうど漱石の「坊っちゃん」は彼の代表作でないが、あらゆる階層の人々の愛好作となつていると同じだ。

× × ×

主人公は初め恋愛結婚をした。正式結婚ではなく、いわゆる同棲生活を七か月やつた。完全に失敗した。そこで主人公は、女性を選んで結婚しようと考えた。もちろん理想的女性なんかこの世に存在するはずがない。少しでも理想に近ければ十分という選定基準だった。

選にあつたのが其志子である。めでたく結婚した。主人公は考えた。どうも日本の女性は理性が不足している。だから、でたためを言い、でたためなことばかりする。結婚生活をうまくやつて行くためには、もつともつと妻を理性的に強くしなければならぬと判断した。そこで彼は、花嫁其志子に数学の勉強をすすめた。花嫁期はどんなに馬力のある女でも素直で従順だ。其志子もやはりそうだった。夫の命ずるままに数学勉強を始めた。

そのうちに子が生まれた。子が生まれても数学のテキストを枕もとに置くことを忘れない。しかし、勉強の方は忘れかけた。それだけではない。優しくつた彼女に、ねばりが出て来た。はいはいと言うことをきいていた彼女が、自己の意見を強力に押し出すようになってきた。数学勉強による理性向上の跡も全く認められない。夫が期待した理性的女性になるどころか、逆に、ふてぶてしい岩乗な女房にふくれ上がつてきた。赤ん坊をだつこして昼寝なんかしている様子は、まるで食べ過ぎた豚が鼻を鳴らしているのと同じだ。もう夫の細腕ぐらいで始末できる女ではなくなつた。ある意味で、怖るべき女に育つてしまつた。

夫は考えた。考えたという言い方は正確でない。考えざるを得なかつたのだ。妻という女は教育可能な生き物ではない。細君教育という言葉もあるが正に空言だ。妻

という生き物は、こつちが素裸でぶつかつて行かない限り絶対に動かない。結局は夫婦という人間関係は、夫も妻も、持てる力を全部出し切つて戦う以外に手はないと痛感したのである。

× × ×

文豪漱石は細君鏡子が、俺のことをなめているといつて憤慨しているが、無理な注文だ。たとえ文豪漱石だつて細君の立場から眺めたら、がらくたのとるに足らぬ男としか見えなかつたであろう。いつだつたか日本放送協会の阿部真之助さんの奥さんが、滅茶苦茶に阿部さんをこきおろしている談話記事を読んだことを思い出したが、やつぱり鏡子さんと同じ目で、同じ胸の女性だと思つた。尊敬できない夫の教育を受ける妻は先ずあるまい。もしも実在したら、ずるい女か、ちよつと頭のおかしい女だろう。

× × ×

夫と妻という仲間は教育し合う仲間ではなさそうだが。そんな生やさしい、ゆとりのある仲ではあるまい。どつちも、まるはだかで本気になつて戦う仲間であろう。

教育し合う仲間でなくなつて、きたえ合う仲間であり勝負を決する仲間だろう。だから男尊女卑の世の中だつて、ヒットラー以上の細君もざらにいたはずだ。男女同権の世の中になつてみたところで大して変わりない。人間に力量の差がある限り、どつちかが威張り出すのは自然であり、必然であり、まことに当然でもある。

× × ×

かくして妻の教育をもくろんだ夫のプランは其志子の成長によつて、無言の圧力に押しつぶされたような格好で、消え去つた。そして二人は、ただお互に実力行使によつてのみ生きて行こうとする。ここまで進んで二人は本当の夫婦となつたわけだ。

× × ×

週刊雑誌などで、ひとしきり「男性飼育」という言葉がもてあそばれた。いいあんばいの言葉だつたと思う。いわゆる賢夫人なる細君が、夫をうまく飼育したなどとうぬぼれていたら、夫はとうの昔に賢夫人を見限つていたんだという例もあろう。動かされてるふりをして、実は相手にしなかつたんだ。夫と呼ぶ男の中にだつて其志子におとらぬ剛の者もなくはないのであるから。